東京　明治十八年一月六日　火曜日　第八百五十八號　日曜日休刊　定價金三錢

時事新報

和戰共ニ支那ヲ侮ル可ラズ

今回朝鮮ノ事變ニ就キ支那ノ決意ハ如何ナル可キヤ、人或ハ説ヲ作テ目下支那ハ佛國ト開戰中ニシテ臺灣ノ諸港モ救ハザル可ラズ、東京ノ邊疆モ顧ミザル可ラズ、南ニ西ニ兵馬紛々タル其際ナレバ朝鮮ノ事ニ就テハ先ツ其致害ノ細大ヲ調査シテ幾重ニモ其不調法ヲ謝シ朝鮮政府ト聯帶叩頭、償金モ大抵ナラバ奮發シテ百方我國ノ怒ヲ慰メ以テ事後ノ穏便ヲ祈ルコトナラン、又彼ノ李鴻章モ明治十五年ノ事變ニハ馬建忠等ニ指揮シテ大院君ノ始末ヲ爲シ精兵三千ヲ京城ニ送ル等覺者ノ耳目ニ走ルガ如キ振舞ヲ爲シテ大ニ世ノ耳目ヲ驚カシタレド今ノ時勢ハ十五年ニ異ナリ、一方ニ佛軍ト睨ミ合ヒナガラ俄ニ事ヲ朝鮮ニ生スレバ日佛兩國ヲシテ掎角ノ勢ヲ成サシムル可シトテ先ツ温和忍辱ノ應答ニ出ツルコトナラン云々ト説クモノアレド我輩ハ漫ニ之レニ和同スル能ハズ今其次第如何ト云フニ元來支那國十八省ノ制度ハ其實一代封建トモ稱ス可キモノニシテ總督ハ恰カモ諸侯ノ地位ニ立チ、生殺興奪ノ權ヲ左右スル其有樣ハ云ハヾ一省ノ王ノ如シ李鴻章ノ如キ則チ直隷總督直隷王トモ申ス可キモノニシテ廣東ニハ廣東王アリ雲南ニモ亦自カラ雲南王アルガ故ニ直隷省外ハ他領他國ニシテ折衝防禦夫レ〱ノ受持(ウケモチ)アレバ徒ニ之レニ干渉スルヲ得ズ又之レニ干渉スルノ念モ薄カラザルヲ得ズ故ニ佛軍ノ攻撃ハ支那全國ニテ防禦スルニハ相違ナシト雖ドモ東京ノ攻防ハ雲南王廣東王等ノ受持ニシテ台灣ノ外援軍艦等ハ福建王ト中央大政府トノ協議ニ定マルノ勢ナレバ直隷王ハ直ニ東京ニ縁ナク又臺灣ニ關係ナクシテ進退綽々餘裕アルノミナラズ直隷省附屬ノ兵卒ハ佛軍北上ノ模様アリナド、聞キ久シク戒嚴ノ中ニ在リシニ未タ北上ノ敵ヲ見ズ李氏幕下ノ親信兵モ未タ一發ノ砲彈ヲ放タザルニ天津河水ノ凍合スルニ逢ヒタレバ羸弱ナガラモ兵士ノ常トシテ少シク無事ニ苦ムノ趣ナキニ非ズ左レバ今日鴻章ノ力能ク中央大政府ノ方向ヲ定メ唯一面ニ事ヲ朝鮮ニ爲サントセバ力ノ以テ其用ニ當ツ可キモノニ乏シカラザルナリ又鴻章一身ノ利害ニ就テ考フルニ彼ノ明治十五年ノ事變ニ當リテ大院君ヲ以テ去リ以テ鼎下ノ薪ヲ除キ朝鮮國人ノ支那ヲ德トスル念ニ乘シテ朝鮮爲中國所屬之邦ノ妄想ヲ實ニセントシタルマデノ實働者ハ鴻章其人タルヲ以テ其當座ハ滿廷守舊頑固黨ノ者ニモ拘ハラズ李氏ノ地位益高ク殆ンド百尺竿上ニ登ルノ趣アリシガ十六年ノ半頃ヨリ佛清間ニ東京事件ヲ生スルニ及ンデ李氏ハ頻リニ和議ヲ主トシ昨年五月佛國艦將ふるにえい氏ト天津ニ會シテ平和條約ヲ整ヘタルニ其條約面ノ行違ヒヨリ郎松事件ヲ惹キ起シタレバ名望漸ク下ラントスルノ勢ナリシガ其後上海ノ談判破裂シテ佛清ノ戰已ム可ラザルニ際シ突然ニモ招商局ノ船舶ヲ擧ケテ之ヲ米國ノらっせる會社ニ賣却シタレバ流俗其輕擧ヲ誹リ言官モ亦之ヲ彈劾シテ將ニ下ラントシタル名望ハ益下リ前ノ朝鮮事件ニ得タルモノヲ後ノ佛清事件ニ失ヒ又李氏ガ當ニ依頼シ信用セラレテ共ニ新民ヲ安堵ノ民タラシメント期シタリシ彼ノ恭親王モ退隱シテ漸ク閑散ノ野ニ養フニ至レバ李氏ハ面目ノ以テ朝野ニ對ス可キモノナク以テ今月今日ニ迨シタルコトニシテ氏ノ佛清事件ニ於ケルハ恰モ云フが基ヲ引キタルモノナリ、然ルニ李氏ハ年既ニ六十ヲ踰エ、顧蒼々、斑々、老イタリト云フト一　名ノ心已ニ灰シタルニ非ズ、お茶引キ總督ト爲リテ終　ノニ非ズトスレバ其一身ノ功名上ヨリ考ヘテモ今回ノ朝鮮事變コソ幸ナレ、千歳ノ一遇ナレ、此幸遇ヲ空ウセザラントスルニ氏ノ胸算カナキニ非ズ又金力兵力ナキニ非ズ此處ヅ一番老後ノ功名佛清事件ニ失ヒタルモノヲ又々今回ノ朝鮮事變ニ回復シテ面目ノ汚點ヲ洗フ可シ抔トテ我國人ガ正ニ温和忍辱ノ應答アラント待チ設クル其最中ニ案外千萬ナル強辨ヲ吐キ之ニ繼クニ又案外千萬ナル虚勇ヲ示スコトナシトモ云フ可ラズ李氏ノ心ハ我輩今ヨリ之ヲ忖度スルニ由ナシト雖ドモ支那國ノ制度慣行ヲ視察シ又氏ガ一身ノ窮達上ヨリ臆測スルモ今回ノ朝鮮事變ハ支那ノ方ニ於テ萬々等閑ニ附ス可キモノニ非ズサレバ我大使ガ京城ニ入テ談判ノ緒ヲ開キ其談緒イヨ〱支那ニ向ヒタル片ノ有樣ヲ今ヨリ豫想スルニ幸ニシテ假令ヒ和議ニ局ヲ結ブ可キモ彼ノ方ニテハ樣々ニ方略ヲ用ヰテ十分ノ利ヲ占ルニ非ザレバ承伏セザルコトナラン或ハ和議成ラズシテ双方共ニ兵力ニ訴ルニモ必ズ支那兵相應ノ伎倆ヲバ呈スルコトナラント信ズ我輩固ヨリ彼レノ方略ニ惑ハサル、者ニ非ズ彼レノ兵力ヲ恐ル、者ニモ非ザレドモ兎ニ角ニ彼レハ和戰共ニ本氣ニ心配スル者ナレバ我方ニ於テモ彼レヲ視テ漠然タル例ノ支那人トシテ侮ル可ラズ極々念入リタル相手ナリト認メテ可ナリ漫ニ彼レヲ蔑視シテ必ズ其温言ニ出ツ可キナド豫期スルガ如キハ未ダ彼ノ國情ヲ知ラザル者ノ謬見ニシテ我輩ノ最モ危懼スル所ナリ

朝鮮事變

○朝鮮國王支那へ往く　昨五日午後左の電報在上海本社特派通信員本多孫四郎君より到達したり

一月五日午後十二時廿七分上海發

朝鮮國王乱ヲ避ケテ山海關ニ到ルトノ風説アリ

此電報の趣にては朝鮮國王李熙陛下には今回の騷乱を避けて支那直隷省と盛京省との境界萬里長城の盡る處に在る渤海有名の長港山海關に赴かるゝか又は既に赴かれたるものにてもあらんか此電報文中にも唯右樣の風説ありとれ事ゆゑ實否明言し難しといへども一昨年の乱に支那人は國王の生父大院君を執へて天津に連れ行きたる例もあれば今度とても油斷ならず南陽碇泊れ支那軍艦が國王陛下を以して何時の間にか山海關に歸りたるやも知るべからざるなり

○韓地最近報　十二月廿八日千歳丸にて仁川を發し去る三日夜住ノ江丸にて横濱に着したる或る人の直話に

○吉松某の事　對州の人吉松某兼て人夫頭(にんぷかしら)又海陸運漕れ事などを業として久しく朝鮮に在り朝鮮語にも通ぞる人あるが今回支那の軍艦數艘南陽に來りたるよしを聞き傳へ視察のためとて十二月十三四日の頃數名の朝鮮人を伴ひ食料等を用意し一艘の韓船に打乘りて仁川港を出で南陽灣の入り口大阜島の傍まで來りて灣内を見渡すに奥の方は山陰(やまかげ)にありて見えねども間近に成に三艘れ支那軍艦あり軍艦よりも韓船の近つくを見て端舟を卸したるが此方の舟もそれと見て前に進ますかゝへの濱邊に漕ぎ寄せ先づ朝鮮人一名を上陸させ續いて他の人々も礒に上りたるが支那軍艦れ端舟よりは兵士數名上陸し最初上陸したる朝鮮人に向ひ種々尋問しゐる間行中には日本人も居るよし答へたるにぞそれ唯事ならずと支那兵五名直ちに此方を指して急ぎ來り漸く近づく時吉松に向て一齊に小銃を發射したるが幸に身に中らず吉松の前に在る傀儡を打碎きたるのみなりし吉松も此處は大事の處所詮五人の兵士に抵抗は出來ずと觀念し低頭平身支那人に向て只管其慈ひを乞ひたり斯くと見るより支那兵は銃撃を止めて近く寄り直に吉松を縛し夫より吉松が所持する袂時計金鎖など一切の品物を分捕しこれを五人の中に配分するに付何ゃ爭論を生して急に片付ゃざりしが漸くして夫れも止み次ぎには吉松を捕へて踏むやら打つやら散々に打擲したり吉松も此儘に打殺さるゝ事ゃと前に降參したるを後悔する折柄同行しゐる朝鮮人が注進でもしたるものか朝鮮官吏一名走り來り種々樣子を聽き支那兵士に向て助命を頼み呉れたるより先づ此場の危難は免かれたり斯くて吉松は支那人に京城に護送せられ凡一週間計り支那兵營中に拘留せられたるが其拘留れ法は一所の獄中に押込め置くにはあらで四人と傳送して順番に各兵營へ各組合の監視に附し暫時番をそれは又直くお隣りの組合に引渡し少しも休息の暇なく其處此處と引廻はされたり此一週日れ間は食事は唯三度しゐるれゝと此時頃に至り何の日本公使より掛合でもありたる樣子にて俄かに放免になり麻浦を經て仁川に無事に歸り着きたるは十二月廿一日の事なりしと（昨日の時事新報馬關よりの通信中に赤松某が南陽にて支那人に捕へられ京城下都監の支那兵營に送られたる後殺されたりとあるは此吉松の話を誤り傳へたるものならん）

○京城の支那兵　前項吉松の目撃目算したる話に依れは京城の支那三營とも兵士充滿し居り城門など兵備の嚴重なるは勿論漢江の渡し場麻浦邊までも支那兵が屯集し居れり其總數は凡そ六千人もあらんといへり

○南陽の支那軍艦　日は忘れたるが日進艦が南陽に行くため大阜島の内に入らんとする時前面に三艘の支那軍艦あり支那艦は斯くと見るより三艘齊しく戰爭の用意を爲し今にも火蓋を切て放つべき有樣に日進艦は呆れ果て此方は祝砲を放ち端舟を卸して諸艦を訪問する覺悟なりしに斯る剱幕にては迚も尋常の禮問は六ヶ敷長居せば何樣の間違起るべきやも測られずとて早々後に引返しより依て南陽灣内には何艘の軍艦ありしや見届くるの暇なかりしといふ又千歳丸が去月廿八日に仁川より歸航れ途次南陽灣の前に來りし時一艘の支那軍艦に出遇ひたり此軍艦は南陽より出て來りしものか又は支那地方より南陽に行くものか分らざりしが此軍艦千歳丸を見ると忽ち運轉を止めたるは如何なる了見かは分らざれども先日日進艦の例もありて甚だ氣味惡く乘組人一同大に心配したるが發砲もせられず無事に其處を通り過ぎたり此調子にては廿八日に馬關を發したる薩摩丸相摸丸なども同しく南陽灣の門前にて誰何せられたるやも知れずといふ

○竹添公使は十二月廿八日の午前五時に一小隊の兵を率ゐて濟物浦を出立したるが同日夕刻無事京城に入りたるに相違なき樣子なり

○流血漂杵　十二月七日朝鮮政府が支那兵の手に落ちし以來事大黨權威を振ひて殺戮を恣にし獨立黨の人々は勿論苟めにも日本人に縁ありたる人といへば離れ彼れの別なく直ちに捕へて糾問し或は殺し或は獄に投し其亂暴慘酷云ふべからず朴泳孝の兄朴泳教も虐殺されたる一人なるよし又編

立黨れ重も
問はを大抵
○磯林赤羽
れた死に虐
赤羽平太郎
馬關まで持
遺族に手渡
行を命せら
日薩摩丸將
郎君れ手を
包みは小生
方も早き上
便を求め郵
部へ送りそ
生が右の包
（十二月二
信中の一節
○井上角
郵便に
○栗野書記
に面會致候
末の質問を
德、英國總
れども同君
現政府い獨
中には皆
されたりと
りと云ふ小
宏集い領
趙秉鎬は外
届はきて外
織したるが
思はる
○同社の船
りて朝鮮國
官吏が出張
御用船とな
りゐる運
の要用品な
○今井少將
へ出張と命
○清輝艦
云ふ
○丁汝昌
たりと
丁提督率
使
○志願兵
士の發起し
筋にては何
なりとの譯
○小菅丸